
バカとテストともう一人のトモダチ ~ Anothere Friend ~

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストともう一人のトモダチ ～Another Friend～

【Nコード】

N9836X

【作者名】

クロ

【あらすじ】

ココは文月学園。

主人公である高峰真白《たかみなしろ》が明久たちとのドタバタな高校生活を送る、そんな話。

真白「ところで作者。キミは受験生なんだろう？こんなことやって

て大丈夫なの？」作者「・・・そんなことは気にせずいきましょ
う！」真白「気にしようよ！！！」

作者には文才がほとんどありません！「駄文？関係ない！読む！」
という人だけGO！

第一話（前書き）

こんにちは！

今作が初めてとなるクロです！

よろしくお願いします！

第一話

カリカリカリカリカリカリ……

この教室ではずっとこのような音が響いている。

それもそのはず。今は振り分け試験の真っ最中なのだから。

（あー。めんどくさいなあ……。）

窓から外を見ながらそう心の中でつぶやいたのは、たかみねましろ高峰真白。

彼もまた（まあ、当たり前だが）振り分け試験を受けている最中だ。

彼はちらり、と横に座っている吉井明久バカを見た。

（さっきからウンウンうるさいなあ……。何言ってるんだろ？）

その明久バカは、『この程度なら……。十問に一問は解ける！二十点は硬いな……。』
とかつぶやいていた……。

（うん。明久、キミ、正真正銘のバカだろ。）

思わずそう思ってしまう真白だった。

と、そのとき。

ガタッ！と何かが落ちるような、倒れるような音が聞こえた。
思わず音のした方を見る真白。

その音は彼が知っている人物の席から聞こえてきた。

(・・・ッ！姫路！？)

そう。その音とは彼女——姫路瑞希ひめじみずきが倒れる音だったのだ。

『姫路さんッ！？』

明久が叫び、騒ぎ始める同級生たち。

そこへ監督の教師がやってきて姫路に向かってこう言った。

——『試験途中での退席は「無得点」扱いとなるが、それでいいかね？』

「ちょ、ちよつと先せ「ふざけるな！！！」真白！？」

明久が何か言ってるが、気にせず続ける。

「体調不良で退席が無得点？姫路が体が弱いのは先生も知ってるでしょ！？」

そう、彼女は生まれつき体が弱い。

そのことは教師であるこの先生は知っているはずなのだ。それなのに。

どうして優秀な彼女が無得点にされなければならない？

「黙れ！教師に逆らうとは何事だ！お前も無得点にするぞ！」

職権乱用気味のセリフが聞こえたが、もう覚悟は決まっていた。

「それで結構。行くよ、明久。」

「う、うん。」

そして真白と明久は、姫路を保健室まで連れて行った。
テストの点など気にもせず。

ココは文月学園。

テストの点でクラスが決まる、実力主義の高校。
そして「試験召喚システム」という科学と偶然、そしてオカルトか
ら生まれたものがある高校。

彼らが文月学園に入学して、2回目の春が訪れようとしていた。

第一話（後書き）

誤字、脱字などありましたら、お願いします！

なお、感想などいただけるとめちゃくちゃ喜びます。

第二話（前書き）

短編のほうを見てくれた方、本当にごめんなさい！！！！！！

せめてものお詫びに面白いと思ってもらえるような作品を書いていこうと思っています。

では、お楽しみください。

すみませんでした・・・。

第二話

P i P i P i P i P i

「うん．．．。」

僕、高峰真白《たかみねましろ》はそんな電子音で目が覚めた。
時刻は5時25分。学校へ行くのにはまだまだ十分な時間がある。

では何故、僕が早く起きているのか。

答えは簡単、「僕の分の弁当を作るため」である。

僕は今、一人暮らしをしている。

家族はというと、両親は海外へ赴任しており、
兄弟は一応姉がいるが．．．。思い出すとトラウマが目覚めそうなのでやめておく。

そんなわけで僕は今『実質』一人暮らしをしているわけだ。

「さて、ちゃっちゃんと作っちゃいますか．．．。」

実は僕、かなり料理ができたりする。

なぜかというと、母親と姉が「必殺料理人」といつてもいいぐらいの腕だからである。

あの人たちの作る料理は本当にひどい。

何せ、野菜だけを使って料理したはずなのに、洗剤のようなにおい、そして言葉では表せないほどの破壊力を持った兵器に変身するのだから。

「うう……。思い出したら吐き気がしてきた……。」

ちなみに、その味はしっかりと僕の楽し^{トラウマ}かった思い出になってたりする。

そんなわけで、彩り豊かなお弁当を完成させた後、制服に着替えて家を出る。

この時点での時刻は7時40分。

文月学園へと続く道は桜が満開だった。

その桜並木の中を僕はゆっくり歩いていった。

第二話（後書き）

というわけで、第二話でした。

いかがだったでしょうか？

誤字・脱字の報告、感想などお待ちしております!!!

今日中にもう一話更新すると思います。

第三話（前書き）

第三話です！

それではどうぞ！

第三話

歩いていくと、誰かが校門の前に立っていることに気がついた。生活指導も担当している西村教諭、通称「鉄人」だった。

一応、挨拶しておこう。

「鉄・・・西村さん、おはようございます。」

「ああ、高峰か。おはよう。ところでお前、今鉄人って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですって。」

「ん、そうか？」

さわやかな笑顔を顔に浮かべてごまかす。

ふう、危なかった。危つく普通に鉄人と呼んでしまうところだった。僕は普通、教師を「くさん」と呼ぶ。鉄人の場合は例外だが。

何故、西村先生が鉄人と呼ばれているかというと、先生の趣味がトライアスロンだからだ。

真冬であっても半袖を着ていることも要因のひとつかもしれないが。

「それにしても高峰。お前ももつたいないことをしたな。」

そんなことを考えていると、鉄人がいきなり話しかけてきた。もつたいない？何のことだ？

そう考えているのが分かったのか、鉄人は言った。

「振り分け試験のことだ。お前のやったことは確かに正しいが、お前の頭ならAクラス入りは確実だったろうに。」

ああ、あのことが。

「そのことなら別に残念とかは微塵も思っ
てませんよ？普通、人が倒れたらアレぐらいはするでしょう？」

しかも倒れたのは知人なのだ。介抱しないほうがおかしいと思うんだけど……。

そういうと鉄人は少し間ばかんとしたような表情を浮かべ、そのあといきなり大声で笑い始めた。

「はっはっは！高峰、俺は長年生徒を見てきたが、お前みたいなやつは初めてだ！」

「……？なんのことです？」

本当に何を言っているだろうか。

「お人よしというかなんと言うか……。お前は本物の人格者だな。」

「よしってください。僕はそんなんじゃないですよ……。というか、先生のほうが人格者でしょ？」

「ははは、そうか？まあとにかく、お前は正しいことをやった。そ

れは胸を張っていいと思うぞ。」

鉄人がそう僕に言い、封筒を渡してきた。

「お前が今年一年間を過ごすクラスが書いてある。まあ、お前の場合は結果は分かっているが・・・。」

封筒を開ける。

中に入っていた紙にはこう書かれていた。

——高峰真白・・・・・・・・・・Fクラス

「一年間、しっかりやれよ。」

そういつて鉄人は他の人に封筒を配りに行った。
その後ろ姿はまさに『人格者』だった。

第三話（後書き）

というわけで第三話でした。

いかがだったでしょうか？

誤字・脱字の報告、感想などお待ちしております！

第四話（前書き）

第四話をお届けです！

それではどうぞ・・・。

第四話

「・・・なんでこんなに教室がでかいんだろう・・・。」

去年は足を踏み入れる機会が少なかった三階に言ってみると、普通の教室の五倍はありそうな教室が目飛び込んできた。

これが『Aクラス』なんだろうか。

中では高橋さんが自己紹介をしていた。

『皆さん、進級おめでとうございます。私はこの二年Aクラスの担任、高橋洋子たかはし ようこです。よろしくお願いします。』

そういうと、後ろの超巨大なディスプレイに名前が表示された。
・・・一体いくらするんだ？

『まずは設備の確認をします。』

お、設備の確認が始まるみたいだ。一体どんな設備なんだ？

『ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート
その他の設備に不満がある人はいますか？』

うわぁ、思ってた以上に贅沢だな。

『参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関してもすべて学園側が支給いたします。他にも何か必要なものがあつたらなんでも申し出てください。』

ほんと、すごいな。

『ではまずはじめに、クラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に出てきてください。』

『・・・・・・・・はい。』

お？Aクラスの代表が出てきたみたいだ。他の人らも注目してるな。そりゃそうか。一番上のクラスの中のクラス代表ってことは学年一位ってことなんだから。

『・・・・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします。』

クラス全体を見ながら言う。・・・？女子しか見てないような気がするんだけど。

そういえば霧島は同性愛者ってうわさがあったな。

『Aクラスの皆さん。これから一年間、桐嶋さんを代表として協力し合い、これから始まる「戦争」でどこにも負けないように』

高橋さんが素晴らしい、霧島が軽く会釈をして席に戻る。

うん、もうそろそろ僕も行こうかな。

——Fクラス バカの巣窟に。

第四話（後書き）

というわけで、第四話でした。

いかがだったでしょうか？

誤字・脱字の報告、感想などお待ちしております！

次回、Fクラスへ！

第五話（前書き）

どうも、クロです。

第五話の投稿。

Fクラスへといざ行かん！

第五話

二年F組と書かれたプレートがある教室があったので、入る。

「おはようございまーす。」

「おう、真白か。おはよう。」

軽く挨拶しながら入ると、挨拶が返ってきた。

挨拶してくれた人のほうを向くと、去年一年を同じクラスでバカさかもとゆうじをしていた友達、坂本雄二の姿があった。

そして彼は、なぜか教壇に立っていた。

「雄二、何で教壇に立ってるんだ？もしかしてキミがこのクラスの担任なの？」

「ありえないことを言うなよ。教師が遅れるらしいから立ってみただけだ。」

だよな、ありえないよな。雄二に教えられるものなんてないもんな。

「もしかすると、雄二がクラス代表なの？」

「ああ、そうだ。」

にやり、と笑って答える雄二。

そこで教室のドアが開き、こんなセリフが聞こえた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」↑真白&雄二

「台無しだっ！」

おお、見事にセリフがかぶったな。

「…………雄二に真白、何やってんの？」

さっきの声の主、明久が聞いてきたので答えてやる。

「何でも先生が遅れてるらしいんだよ。だから代わりに教壇に上がったんだってさ。」

「先生の代わりって、雄二が？何で？」

「雄二がクラス代表だから、ぐらいいし理由は無いと思うんだけど…………」

「これでこのクラスの全員が俺の手駒だな。」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトたちを見下ろす雄二。
何故、床に座っているかというと、理由は簡単だ。

——椅子がないからである。

ついでに言うならば、机もない。あるのは座布団とちゃぶ台だけだ。

「それにしても…………。さすがはFクラスだね。ひどいもんだよ。」

「さすがにこれは、な．．．。」

そんなことを話していると、不意に背後から

「えーと、ちょっと通してもらえますか？」

という覇気のない声が聞こえた。

後ろを振り返ってみると、寝癖のついた頭によれよれのシャツを貧相な身体に着た、いかにもさえない風体のおじさんがいた。

どう見ても、生徒には見えない。多分、このクラスの担任だろう。

「それと、せきについてもらえますか？HRをはじめますので。」

「はい、分かりました。」
↑明久

「りょーかいです。」
↑ 真白

「うーっす。」
↑雄二

と、三者三様の返事を返し、席に着く。

先生は僕らが席に着いたのを確認してから口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組の担任の・・・」

黒板のほうを向いて、名前を書く……と思いきや

「福原慎です。よろしくお願いします。」

やめた。どうやらチョークがないようだ。チョークすら支給されていないのかよ……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください。」

Aクラスとはすごい差だな。

「先生、俺の座布団、綿がほとんど入ってないですー。」

「あー、はい。我慢してください。」

え？それって不備じゃないの？

「先生、卓袱台の足が折れてます。」

「木工用ボンドが支給されますので、それを使って後で自分で直してください。」

変えてあげてよ！そこは変えてあげてよ！

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

これはさすがに業者にお問い合わせを……

「わかりました。」

よかった。そこまで常識はずれな高校――

「ビニール袋とセロハンテープの至急を申請しておきましょう。」

だったぜ、畜生！

というか、それで風雨をしのげといっているんだろうか・・・。

先生の真意が気になる・・・。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。」

うん。もついいや。

その後もいくつか不備が言われていたが、先生はすべて「我慢してください。」か「自分で調達してください」の二択で答えていた・・・。

第五話（後書き）

第五話でした！

次回、混沌^{カオス}な自己紹介が始まる！！！！（笑）

第六話（前書き）

第六話、更新です！遅れてすみません・・・。

文化祭とかテストとかテストとかがあつて更新できませんでした・・・。

それではどうぞ！

第六話

不備の確認（まあ、たいていのことはスルーされてたけど）が終わると福原先生は、

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

と言ってきた。

自己紹介か。今年一年を同じクラスで過ごすんだ。その戦友の^{なかま}ことを知るのはいきなことじゃないだろう。

福原先生の指示に従い、廊下側の生徒の一人が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「^{きのしたひでよし}木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

ん？よく見たら秀吉じゃん。僕の去年のクラスメート、バカ友達の一人だ。

変な言葉遣いに小柄な体（僕もあんまり大きくないが）。肩にかかるとぐらいの髪をゆったりと縛っている。間違いない。

・・・そんな格好してるから女に間違えられるんじゃないかな？

そう思った僕だったが、自己紹介の途中なので、言葉を飲み込む。

「・・・と、いうわけじゃ。今年一年、よろしく頼むぞい。」

そういつて軽やかに微笑み、秀吉は自己紹介を終えた。

・・・今のは僕も少しドキッとした。

そんなことを考えているうちに、次の人が自己紹介を始めた。

「・・・・・・・・・・土屋康太。」

お、康太じゃん。彼も去年のクラスメートであり、バカ友達の一人だ。

・・・って言うか、自己紹介、短っ！

たった四文字で終わりって！もつと話すことあるでしょうが！

心の中でそう突っ込みを入れてみると、自己紹介の声が聞こえた。

「——です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は——

お、珍しい。女子の声だ。見渡す限り男だったから女子はいないのかと思ってた。

——吉井明久、ならびに高峰真白を殴ることです」

うおいつ！？誰だつ！？そんなピンポイントで危険な趣味を持つ奴は！？

声がしている方向を向いてみるとそこには、

「はろはろー」

「……………あう。島田さん。」

僕と明久の天敵、島田美波さんしまだみなみが笑顔で手を振っていた。

「吉井に高峰、今年もよろしくね。」

横を見ると明久が、『そんな……。僕がこいつらと同レベルなんて……。！』とつぶやいていた。

僕は、明久はそれ以上のバカだと思っただが……。

「——です。よろしく。」

明久の前の人が自己紹介を終えたようだ。
一応、明久に聞いてみる。

（ねえ、明久。自己紹介はどんな風にするつもり？）

（軽いジョークを織り交ぜてやるつもりだよ。まあ、見てて。）

そう言いつつ明久が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

あ、バカ、このクラスでそんなことやったら——

『『『『『ダアアーリーーン！！』『』『』『』』』』

——こうなるだろうが。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

明久^{バカ}は作り笑いを浮かべながら席に着いた。僕が言われたわけでもないのに吐き気が止まらない。

明久が終わったから僕の番か。うーん。特に話すこと、無いんだけどなあ……。

あ！そうだ。ジョークで『僕、実は女の子です！訳あって男装しています！』
とか言ったらウケるかもしれない。うん、これで行こう！

「高峰真白です。実は僕、女の子で、訳あって男装しています！」
ふふふ。僕の渾身のボケ。さあ、どうだ！

『『『『『男装……。一人称はボク……。女の子……。』』』』』

？皆は何を——

『『『『『『』』』』』』ということは、ボクっ子！？萌える！！！！！！』』』』』

——言ってるんだろう。って……。……。……は？

イヤイヤ、僕どう見ても男ですよん？間違えないですよん？はっはっはっ。この人たちは何を言っているのやら？

「そ、そうだったんだ……。ゴメンね、真白。今まで男だと思ってた……。いや、もしかして、と思ったことは何度もあるんだよ？でも、まさか本当だとは……。」

イヤイヤイヤイヤ、何真剣な顔して言ってるの吉井君！？男ですって！正真正銘、MANだって！

「……………男^{おとこ}娘……………ッ！（ブシャアアアアア）」

つて、康太あああ！？

ものすごい勢いで鼻血が噴出してますが！？大丈夫なの！？それと今、『男』の発音違ってなかった！？
というか早く、みんなの誤解を解かないと！

「皆！？ジョークですよ？冗談ですよ！？何処をどう見たって男じゃないですか！？」

『『『『『いやいやいやいやいや。』』』』』

何故にそこで満場一致！おかしくない？どっかおかしいよね、この人たち！

ポンと両肩に手を置かれ、振り返る。

するとそこには、「ものすごくいい笑顔の」雄二と、「その気持ち、分かるよ……。」とでも言いたげな顔の秀吉が立っていた。

……………うん。秀吉はともかく、雄^{コウジ}二は殺す。

「雄二、ちょっといいかな……？」

「？ 何のようだ？」

真白に手を引かれ、廊下に出て行く雄二。

そしてすぐ、断末魔の悲鳴が聞こえ、秀吉は静かに手を合わせて合掌。

3分後、廊下でボロ雑巾のようになって横たわる雄二（だった物体）がいた。

誰がやっただろうネ？

第六話（後書き）

今回は少し長めでしたね。

・・・え？これぐらいが普通なの？

次回、ピンクの髪ひとのあの女がやってくる！

バカテスト集？&主人公設定（前書き）

久しぶりの投稿です！

待っていたいたっていた方々、本当にごめんなさい……。
でも、言い訳をさせていただきます。

塾のテストと学校のテストが3連続であつたんです。

「テストでいい点数を取らないとパソコンは使わせない」と母に言われてパソコンを取り上げられてしまつて書けませんでした……。

言われたぎりぎりの点を取れたので、今書けていますが、これかもまたこういうことが頻繁に起こると思います。

さらに、タグにもあるように作者は受験生なので、12月を過ぎたあたりから受験が終わるまで書けなくなってしまうと思います。
どうか気長にお待ちください。

とはいえ、まだ（ぎりぎりですが）書けるので、書けるところまで書いてみようと思います。

それでは（忘れていた）バカテスト集？&主人公設定です。
お楽しみください……。

バカテスト集？&主人公設定

バカテスト第一問【化学】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為、危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんはひっかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

高峰真白の答え

『問題点……これから時代はIHだということに気がつかなかったこと』

教師のコメント

そこも問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても

第二問【国語】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意な事でも失敗してしまう事』

『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』など

がありますね。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

高峰真白の答え

『（１）河童も木から落ちる』

教師のコメント

落ち着いてください。河童は川にすむとされています。木には登りません。

第三問 【英語】

問 以下の文を訳しなさい

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはthisだけですか。

吉井明久の答え

「●」「♪」×

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

高峰真白の答え

「祖母は去年の冬に他界しました・・・。」

教師のコメント

・・・すみませんでした。

主人公設定

名前：たかみねましろ高峰真白

身長：164？

体重：47？

性格：面倒くさがりで鈍感。しかし、他人の好意（対自分のものを除く）はすぐに分かる。

特技：これといってないが、あえて言うならば料理、掃除などの家事全般。

好きなもの：甘いもの、ゲーム、友達、努力してる人、動物。

嫌いなもの：苦いもの（嫌いというか苦手）、友達を傷つける人、努力を笑う人、お化けの類。

座右の銘：【触らぬ神に祟りなし】

【人生は諦めと慣れとノリが肝心】

外見：童顔。中学生くらいで係員に何も言われずに映画を中学生料金で見られるほど。

中性的なルックスで、女だと言われれば納得できる。男にしたらは長い、暗い茶髪。

備考：本作の主人公。性別は（一応、）男。雄二と一緒に明久をいじって楽しんでいる。

話し方は敬語とため口が混ざったようなしゃべり方。

一人称は僕で、普段はおとなしいが、一度切れると、手がつけられない。

切れると一人称が俺に変わり、かなり暴力的になる。

喧嘩の強さは雄二と同じくらいで、武器（エモ）も使えるが、素手のほうが強い。

中学の時代、とても荒れており、『長月の狂犬』と呼ばれていた。しかし本人曰く、まだあれは『狂犬』ではないらしい。

甘いものがとても好きで、いつも学校にお菓子を持ってきている。中でもチョコレートが大好きで、1日に板チョコを15枚平らげるほど。お菓子を食べている姿は小動物みたいでかわいい。ただ、糖分の取りすぎなのか、いつも体がだるい。

明久とは中学のときからの知り合いで、放課後はよく明久の家でゲームをしている。真白も明久に負けないくらいゲームが好きだが、明久のようにすべて買っているわけではなく、面白そうなものとうでないもの、いわゆる神ゲーとクソゲーを見極めて買っているため、そこまで家計は圧迫されていない。

とても頭が良く、単教科で750点前後は体調が悪くても普通に取れる。

得意な教科は社会全般（日本史、世界史、現代社会）。苦手な教科は英語と保健体育。

その中でも歴史が強く、毎回1000点以上は取ることができる。特に保健体育にいたってはいい時で15点前後、悪いときは2、3

点と群を抜いて悪い。

英語は大体60点前後で、Fクラス並み。

その他の教科は大体800〜850点ぐらい。

こんなばかげた点数が取れるのは真白が持っているある能力のおかげ。

同じく中性的なルックスのためか、秀吉とよく馬が合う。

真白がへこんだときは秀吉が慰め、秀吉がへこんだときは真白が慰めるといふ連係プレーが生まれており、他の生徒たちはその光景を見て《美少女たちの絡み》と呼んでいて（もちろん、真白と秀吉にとっては不意この上ない）、ムツリーニがその写真を販売しており、とても良く売れているという。

ちなみに、真白の写真はムツリ商会で飛ぶように売れており、その多くは男子だったが、最近は女子の客も増えつつある。

バカテスト集？&主人公設定（後書き）

いかがだったでしょうか？

ストーリー的にまだ出せない設定もあるので、今回のところはここのまです。

ストーリーが進んでいくと同時に設定のほうも追加していきますので、よろしくお願いします。

感想、誤字・脱字のご報告など、待ってます！

クロ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836x/>

バカとテストともう一人のトモダチ ~ Anothere Friend ~

2011年11月17日18時04分発行